

お墓参りをし、あるいは門口で迎え火を焚き、亡き人をお迎えした迎え盆の夜の空には、満月がかかっています・・・。お盆は、亡き人との再会の時です。普段から、常に亡き人を思っている方はたくさんいらっしゃる事でしょう。

しかし、お盆は、盆棚^{ぼんだな}をつくり、お供え物を用意したりなど、普段とは違う準備をします。その意味で、お盆は亡き人に出会う特別な時間だといえます。亡き人と再会する意味は何でしょうか。それは、その人と、新たに出会いなおすためではないかと思います。

迎え盆の夜の月は、満月です。それは、月全体に太陽の光が当たっているからです。違う角度で光が当たれば、半月になり、上弦^{じょうげん}や下弦^{かげん}の月になり、三日月^{みかづき}になり、光が当たらない角度であれば新月^{しんげつ}になります。

亡き人を月にたとえるならば、生前^{せいぜん}私たちはある特定の角度からしか、その人を照らしていないものだと思います。夫婦の立場から当たる光、友人の立場から当たる光、親子の立場から当たる光。それぞれの角度から当たる光によってその人を、私たちは見ているわけです。

もちろんそれはわるいことではありません。一人の人間の全体像というのは、完全に把握しきれものではないからです。

しかし、その人が、私たちの前から永遠に去ってしまった時、むしろそのことによって、さまざまな角度から光を当てられるようになります。例えば、生前その人が語った言葉について、その時にはわからなかったけれど、亡くなってから、はっとその意味が腑に落ちることがあります。ああ、あの言葉は、私のことを深く思って言った言葉だったのだ、と。

あるいは、その人の友人などから、さまざまなエピソードを伝えられたりすると、全く知らなかった一面が見えてきたりします。

『 禅のこころ - 曹洞宗 - 』

さまざまな光の角度によって月の姿がくっきりと浮かびあがるように、お盆に亡き人と出会い直すことで、その人にさまざまな光が当たり、いのちの様々な側面が浮かびあがってゆく、そのような心の営みが、お盆の時間に託されているのではないのでしょうか。

お盆は毎年巡ってきます。お盆に集う縁ある方々との語らいの中で、亡き人の姿は、どんどん深く豊かなものになっていくでしょう。

どうか、お盆の時間を、大切にお過ごしください。

— 終 —